

# 未来への伝承

## 霞ヶ浦周辺で消滅した生き物「ハイガイ」

現在の霞ヶ浦では消滅し、見られなくなった生き物の中で、縄文時代によく見られていた生き物がいくつかあります。今回は「ハイガイ」という貝を紹介しましょう。

ハイガイ(*Tegillarca granosa*)は、日本や東南アジア、インドなどに分布しますが、日本では絶滅危惧種とされています。昭和初期には西日本の大規模な内湾に生息していましたが、内湾の埋立や干拓によって消滅し、現在は有明海、不知火海、伊万里湾などに生息が確認されている程度のみです。潮間帯、水深10mの泥底、特にぬかるみの激しい泥質干潟に生息します。かつて貝殻を焼いて「貝灰」を製造していたことから、「ハイガイ」と名づけられました。殻がとて厚く、殻の表面に放射状に走る粒々した筋が見られるのが特徴です。

ハイガイはこのように西日本以南に生息する貝ですが、縄文時代には温暖化により、前期をピークに生息域を東北地方まで広げ、仙台湾や霞ヶ浦周辺、東京湾などに広く分布していました。東北・関東地方でハイガイが出土することは、当時の海水温が現在よりも高

かったことを示し、ハイガイはこの地域の温暖種の指標として重要な貝です。

縄文時代の大きな環境変動に「縄文海進」があります。地球はこれまで温暖化と寒冷化を繰り返して、縄文時代早期以降(約11000年前)は温暖化による海面上昇に特徴づけられます。寒冷な時期に作られた谷に海が入り込み、日本各地に複雑な海岸線を持つ内湾や干潟が形成されました。この縄文時代に海岸線が陸域に入り込んできた現象を「縄文海進」と呼んでいます。これにより、縄文時代の霞ヶ浦は現在よりも一回りほど大きい海となり、今の利根川や北浦ともつながって広大な「古鬼怒湾」が形成されていました。

土浦市内では、縄文時代後葉、前期前葉の貝塚(約7000〜6000年前)から多量のハイガイが出土しており、現在の桜川下流域まで海が入り込み、ハイガイが生息していたことがわかっています。土浦市で調査された最古の貝塚は、下坂田塙台遺跡で見つかった縄文時代早期末〜前期初頭のもので、小さな土坑からハイガイやマガキ、オキシジミなどの内湾奥部の泥質干潟に生息する群集が出土しました。この遺

跡は現在の霞ヶ浦から約6km、桜川左岸の台地上に立地します。また同じ台地上で下坂田の赤弥堂遺跡からは、縄文時代前期前半の竪穴住居跡から、ほぼ同時期のハイガイとマガキを主体とした貝塚が見つかっています。桜川流域で見られるハイガイは、縄文前期までは主体的に見られませんが、中期以降はほとんど見られなくなり、桜川流域では消滅した可能性があります。

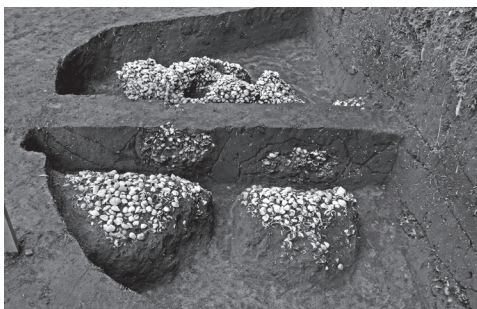
ではなぜ消滅してしまったのでしょうか?その理由については、泥質干潟の衰退と、海水温の低下の二つの原因が考えられています。

約7000年前の縄文海進最盛期に、湾奥部にハイガイの生息に適した泥質干潟が形成されましたが、その後河川の土砂によって干潟の環境が変化してきたことや干潟が埋積されたことなどによって、生息域が限られた可能性があります。また、縄文中期以降にも、泥質干潟に生息するマガキについては出土例があることから、ハイガイに適した海水温ではなくなった可能性もあります。

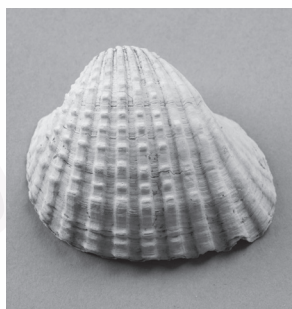
この縄文時代に限って見られた貴重なハイガイは、秋の企画展「霞ヶ浦の

誕生と貝塚―縄文海進期の人々の暮らし―で見ることが出来ます。ぜひご覧ください。

岡上高津貝塚ふるさと歴史の広場  
(0826・7111)



▲竪穴住居から見つかった貝塚(赤弥堂遺跡)



▲ハイガイ(赤弥堂遺跡出土)